

ソフトカプセル製造大手の三生医薬（静岡県富士市）は、日本住友製薬系のDSP五協フード&ケミカル（大阪市）と共同で、トウモロコシなどを使った植物性ソフトカプセルを開発した。新たな植物性カプセルを生産するため、南陵工場（同県富士宮市）で2018年度中をめどに増産投資を実施する。需要地の米国を中心に海外で販売攻勢をかける。

## 三生医薬、健康食品向け

新開発の植物性カプセルは9月にシンガポールで開いた健康食品産業の展示会「ビタフーズ」に出展し、アジアで営業活動を始めた。米国でもこのほど営業を開始。すでに海外の健康食品販売会社など40〜50社程度から

# トウモロコシで植物性カプセル



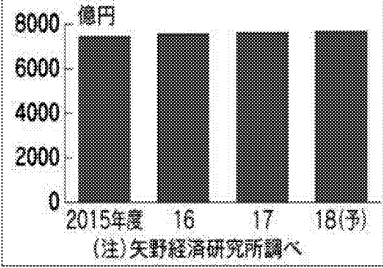
新開発の植物性ソフトカプセルは40〜50社程度から引き合いがある

## 富士宮の工場、設備投資

引き合いがあるという。3年後に売上高4億円を目指す。南陵工場は新製品を生産するため、18年度中をめどに数千万円を投じ、生産能力を増強する。今後は販売動向などを見極めながら、2億円規模の設備投資も検討する。ソフトカプセルの原料は国内ではゼラチンが一般的だが、海外では宗教や嗜好などの理由から植物性の需要が大きい。植物性カプセル原料の主流で海藻由来の「カラギーナン」には発がん性の指摘もあるため、受託製造を手がける三生医薬は代替製品の開発を急いでいた。新たな植物性カプセルで海外の需要を取り込んでいく。

矢野経済研究所（東京・中野）の推計によると、国内の健康食品市場は17年度に16年度比ほぼ横ばいで、頭打ちの状態が続いている。静岡県内には健康食品を受託生産するメーカーが集積しており、各社とも海外での事業展開の拡大が急務になっている。

国内の健康食品市場は頭打ち状態



三生医薬はソフトカプセルを使った健康食品ながら、24%を握る最大手。14傘下に入り、設備投資や年には米投資ファンドの海外展開に力を入れている。カール・グループの。